



寄り道・まわり道・弁理士までの道

前 直美

私は、研究者になりたいと思っていましたが、今は、弁理士・技術士（生物工学）として、研究開発のサポートおよび主に特許による研究成果の保護・活用をお手伝いする仕事をしています。紆余曲折の末ここに至るまでの経緯は、迷路の中でさまようマウスのように不器用で計画性もなく、あまり他人の参考にならないかもしれませんが、しかし、悩み多き若手の読者の方々が少しは気が楽になるかもしれないということで、そんな「私の場合」のお話をさせていただくことになりました。

好きの延長で研究所に就職

将来について真剣に考えたのは、大学付属の私立高校で卒業が近づいてからでした。迷った末、そのまま進学できる大学の学科の中から生物学を選びました。漠然と、これからはバイオの時代だと思っていたのですが、何よりも、好きなことでないと長くできない性質なので、自分が本当に好きなことをとことん考えた結果、子供の時から好きだった生き物に係る仕事に就きたい、と思ったからです。

しかし、研究ができる仕事の募集はほとんどなく、何の縁故もないのに就職活動も熱心にならなかったで、大学卒業が近づき、年が明けても就職先は未定でした。

そんな私が三菱化成（現・三菱化学）生命科学研究所に研究助手として就職できたのは奇跡的でした。ここは例年大卒女子の募集は1回、採用は数名なのに、その年は珍しく二次募集がありました。私はすでにその2回の募集を見逃してしまっていました。が、そこに、三次募集があるから応募したらどうかと大学の就職支援担当の方から電話があったのです。きわめて異例の三次募集と大学からのお知らせのおかげで、当初の希望のとおり研究の仕事に就けることになりました。大変幸運なことでした。

この研究所は大学に似た雰囲気的基础研究所で、皆仲良く楽しく仕事していました。研究助手は、基本的には上司の研究員の指示で実験をしていましたが、私は偶々多忙で不在がちな研究室長の下に配属されたため、かなり自由に幅広い実験を経験させてもらうことができました。

しかし、やがて自分が博士号を持っていないことに限界を感じ始めました。また、研究の楽しさとは別に、も

う少し、自分のしていることが世の人の役に立っている実感が得られるような仕事をしたいと思うようになっていました。さらに、当時読んだ本に大変影響を受けました。「地球環境報告」という本で、80年代であった当時、すでに現在の環境危機に大いに警鐘を鳴らす書でした。とはいえ、当時日本では、社会人が大学院に戻る例もあまりなく、私にはとてもそれをする勇氣はありませんでした。

そこで、再び勉強するならアメリカで、環境問題について学びたいと思い、留学の準備を始めました。しかし準備期間が足りず、TOEFLを受けている途中で、諦めて帰ろうかとさえ思いましたが、とりあえず最後まで受けました。これが何とか無事必要レベルの点数に達し、唯一願書を出したワシントン DC の大学院から入学を許可されました。

米国の大学院から企業へ

5年余りお世話になった研究所を退職し、渡米しました。私が入ったのは環境科学という、環境汚染や公衆衛生などに関する理系科目と、経済学や環境政策決定プロセスなどに関する社会科学系科目とが半々の面白い修士コースでした。何もかも新鮮な留学生生活で、楽しいことも多い一方、勉強はハードで孤独でした。ワシントン DC は場所柄、昼間は政府系機関などで働くパートタイムの学生が多く、授業はほとんど夜で、彼らは仕事の後授業に来て、授業が終わるとすぐ帰るというパターンでした。一方、私は昼間は一人で勉強していました。それでも時間が足りないほど、読むべき本や資料が多く、ついていくのに必死でした。

二学期目に入ってから、卒論でお世話になった研究室の先輩から、ニュージャージー州の製薬会社（ロシュ社）で日本人の女性研究者が自分の部下を探しているので、応募しないかと連絡がありました。いろいろ考えた末、そのポジションに応募し、採用されました。二学期目の終了後に、大学院を休学し、引越しをして入社しました。

ロシュ社には、多くのビルや工場があり、移民や外国人も多く、毎週月曜に新入社員が大勢入社してきました。そんな中で、日本人は私の上司と私以外、ほとんどいませんでした。昼は研究職として働き、夜はラトガーズ大学院に通って勉強しました。今度は私がパートタイムの

学生でしたが、ラトガーズでは逆にほとんどがフルタイムの学生でした。上司をはじめ、他の研究者や従業員から学ぶものも多く、外国企業での研究や情報管理、人事システムなども、すべて貴重な経験となりました。

ところが、1年後、ワシントンDCの大学院の休学の延長が許されなかったため、退学か退社かの選択を迫られました。退学して、ロシュで働きながらラトガーズ大学院で博士号を取得することもできました。しかし結局、いったん戻って最初の環境科学のプログラムを修了しようと考え、1年2ヶ月で退社となりました。

再び引越しをし、復学しました。なんとか無事修士号を取得したところで、いったん帰国しました。滞在中にグリーンカードが取れたので、ここで帰国しないともう日本に帰らないように思い、また逆にいつでもアメリカに戻ってこられると考えたためです。しかし、結果的には、その後、グリーンカードは返上しました。

特許事務所との出会い―弁理士・技術士の仕事

日本での再就職は厳しいものでした。当初は環境保護関係の仕事を希望しましたが、当時日本はいわゆるバブル崩壊直後であり、環境に関する社会の意識も低い状態だったため、仕事自体がありませんでした。また、当時の日本はまだ求人の条件に性別や年齢の制限があり、希望に近いものがあっても私は応募すらできませんでした。

しかし、落胆していても仕方ないので、これまでの自分の専門知識・経験を生かせ、自分に続けられそうな仕事を探しました。生物系の研究開発のキャリア、米国企業での経験、多少の英語、それらが生かせ、なおかつ年齢や性別で制限がないのは、特許事務所だったのです。

そこで特許事務所の求人を見つけ、応募し、就職しました。よく知らないまま、他に選択肢が乏しい状況で飛び込んだ世界でしたが、すぐにこの仕事なら一生続けられるかもしれない考えるようになりました。面白かったからです。

一生続けるなら弁理士資格を取りたいと思いつつ、まずは実務を覚えることを優先し、並行して技術士の資格を取得しました。これは研究開発経験がベースになり、運よくさほど苦勞せずに済みました。そして、次に弁理士資格を取得しようとしたところへ、駆け出しの身で訴訟がらみの重要案件を担当することになりました。こうなると、仕事はおもしろい、おもしろいので資格は取りたい、資格は取りたいが勉強時間がない、という状況で、資格のための勉強をいったん中止して仕事に没頭しました。その案件が一段落してから、今度は仕事を減らすために事務所を退職し、少しだけ技術士として仕事をしな

がら集中的に試験勉強をし、運よく弁理士資格を取得することができました。

弁理士の仕事は、研究そのものではなく、あくまでサポート役です。研究者（発明者）と特許庁との間で、あるいは訴訟案件では研究者と弁護士さんとの間で、橋渡し役をしたり、文献調査や海外とのやりとりをしたりします。ほとんどがデスクワークであり、勝負の土俵は基本的には紙の上、つまり言葉であり、文章です。句読点ひとつにもこだわります。そこに句読点があるかないかで、文脈が変わり、ひいては裁判に負けることもあるからです。また、逆に、訴訟チームの一員として働く場合には、相手方の細かいミスを徹底的に探すこともします。そういった、いわば重箱の隅をつつくような作業は注意力と忍耐力を要します。また、書類などの提出期限は絶対なので、常に時間に追われ、期限に追われ、場合によっては年末年始さえ休みもないこともありますし、期限が近いのに書類ができないときは寿命が縮むような思いもします。法改正や新しい判例、国際動向など、勉強は一生続きます。

一方、弁理士は、専門分野に限っても広くいろいろなテーマについて、常に新しい技術を勉強し、驚いたり感心したりの連続で、飽きることがありません。そして、従来から年齢や性別による差別がなく、実力があれば、一時仕事を離れても復職が困難ではなく、短時間の就労や自宅勤務など、さまざまな働き方が可能です。女性の弁理士は、まだ全体の1～2割程度ですが、これらの点から女性には特に有利な仕事といえると思います。

いつからでも何度でも―気持ちがあれば実現する

最初にしたとおり、私は、研究者になりたかったけど、なりきれず、今後なることもないと思います。しかし、どうしてもなりたければなれたはずですが、今からでは無理と思った後も、何度かチャンスはありました。

結局、私はそれらのチャンスを選ばずここに至ったわけですが、簡単にそう決められたわけではなく、迷路の中で何度も行くべき方向を見失ったり、行きたい方向にうまく進めなかったりしました。しかし、そうした中で、壁にぶつかっても、ちょっと冷静になって見回せば必ず出口があるし、転んだら何か拾って立ち上がればよいということも覚えました。つらい時期や回り道は一切無駄になっていないと思います。これからも迷路は続きます。

若い方には、もし万が一、希望の進路へまっすぐ進めなくても、少し見方を変えてみると必ず別の道や行きたい方向へ続く道が見えてくる、いつかまた次のチャンスにも出会うということを信じてみてほしいと思います。